



よいよNHK朝の連続テレビ小説『ばけ
け』が今月二十九日から始まる。怪談を
やってほしいという要請は、うんと増えて
いるし、市内のあちこちで小泉八雲・セツ夫妻のイラ
ストに「あげ、そげ、ばけ」と染めた幟が立っている。
朝ドラで取り上げられることの影響力はすごい。

十五年前の朝ドラ『ゲゲゲの女房』の時は、水木し
げるの妻、つまりゲゲゲの女房の実家が安来にあるの
で、やっぱり相当な騒ぎだった。同じ地区に嫁いでい
る義妹から驚くような話をよく聞いた。ドラマの評判
が高いと、人は変哲のない小さな町にでも足を運ぼう
とするもののように、バス仕立てで観光客が次々と
やってきたそうだ。当然一過性で、とつとつに元の佇ま
いに戻っている。戻らなかったらそっちの方が怖い
のである。

落語教室生に小泉八雲の怪談を勧めるようになった
のは一年以上前だ。そこから少しずつ語る子も演目も
増えていった。高座でかけるようになって、なんか定
着してきたかなと感じ始めたところに、『ばけばけ』で
ある。以降関連した企画が入り始めたが、「堀川ゆう
れい船」もちろんその一つ。リクエストされれば子
どもたちも気分がいいので、自ずと気合いが入る。堀
川ゆうれい船は、要求も高かったもので、それに応える

べく子どもたちは相当な回数を練習したはずだ。自身
の八雲やセツへの関心も高くなつて、夏休みの研究に
取り上げた子もいた。ちなみに、この子は研究成果を
まとめたもの(学校でやってる模造紙に書くもの)を
縮小コピーして、乗船客に渡している。それがとても
好評だった。

練習量と、作者理解の深まりと、表現するいくつ
かの場が得られたことで、ゆうれい船をきつかけにこど
もたちの語りは確実に進化した。つまり、繰り返し読
み語りするうちに、子どもたちは八雲文学のファンに
なったのである。落語もそうだが、好きな噺とそうで
ない噺では、語りにこもる力に大きな差が出る。言わ
ないでも噺を大切に思っているかどうかは、聴き手に
伝わるのである。

研究者の池田雅之氏は、八雲の怪談を読むと「心の
癒やし効果と清涼感をもたらす」と書いているが、
まったくその通りだと思う。自分の読後感にもある
し、語り終えた子どもたちの顔にも、それは見て取れ
る。こども落語で怪談をかけ続けるというのは、こど
もたちの心の健康にも効果がありそうだ。それをいつ
も聞いているようにも。

堀川ゆうれい船以降、新たな語り手が続々誕生して
いる。ぜひ、聞いていただきたい。

老い老いに

木幡智恵美

50



の年の九月、アメリカの同時多発テロから一年を経て、二人の方から9・11
についての文章が寄せられている。一人は前年から夕焼けに投稿してくださつ
ている大学生P・Kさん。二週にわたって綴られている。抜粋を挙げる。

私がこの三月に肉眼で見た(中略)頃はまだ、一帯がビニールか何かの幕で覆われ、惨
事の生々しさが残っていた。(二週目)書き手は上野千鶴子氏。書き出し三行目にある
この短い文が頭から離れない。「世界にはたくさんの9・11がある」:(中略):瞬時
に木端微塵になった数千というニューヨーク市民も、アメリカ軍がこれまで何十年かけて
殺してきたアフガニスタンの民も、被害者個々の命はまったく等しい。経済的に富んだ国
は追悼式も催せるだろうが、国が変われば、遺体が野に放置されたままのところもある。
罪なくして命を奪われた者にとってはどんな手段の暴力であれ、受けたすべては9・11
である。

もう一人は、現在も寄稿を続けてくださっているN・Rさん。編集長への手紙がテロ後
一年経って掲載されることになった。朝日新聞の論説に対する意見として書かれたものだ
が、このテロを「世界の底が抜けるような衝撃」として、次のように語られているのを再
読し、なるほどと思ったので挙げてみる。

国家を単位として成り立っている現在の世界のシステムが、あの前代未聞の一撃によつ
て綻び、揺さぶられているからです。この事件は、国家によつてはもはや処理することが
できない事件であり、そこに事件の新しさもあります。:(中略):絶対王政とそのあと
の市民革命を経て成立した近代国家が、そして、その国家を単位に成り立っている近代国
家が、終焉に向かって、長い、しかし、必然的な道のりを歩み始めたことの現われのひと
つだと、私は考えます。

この記事が書かれたのは四半世紀も前のこと。近代国家が終焉に向かっていく状況は今も
続いている。ロシアとウクライナ、イスラエルとパレスチナ問題はまったく先が見えない
し、一触即発の緊張状態があちこちにある。国家間で解決できない問題は世界全体で考えて
いかねばならないのだろうが、どれも根が深く混沌とした情勢はまだまだ続きそうだ。

30代フリーター 先代の天皇（現上皇）は皇太子時代から太平洋戦争の激戦地などを訪ねる慰霊の旅を続けた。その回数は数十回に及ぶと推定される。敗戦で受けたダメージによつて天皇制の根幹が揺らぎかねないことへの危機感がそうさせたのではないか。

年金生活者 天皇制の根幹とは、天皇が農民の神を拝む代わりに、自らを神として農民に拝ませる「ギブアンドテイク」の「交換」のシステムを指す。

大和王権は統一国家を成立させたとき、既存の群立国家の神を自分たちが拝む代わりに、自分たちの神をそれらの諸国家に拝ませるといふ共同幻想の「交換」を行い、緊密な支配システムを築いた。皇位継承儀式の大嘗祭では、天皇は農民の神を拝み、代わりに自らを神として農耕民に拝ませる「交換」を行い、統一国家成立の過程を反復する。ここで注釈を加えておくと、いずれの場合も、互いに相手の神を拝む行為は、相手を神として拝むことと同義となつていふと考えていい。

吉本隆明によれば、この祭儀が行われる悠紀殿、および主基殿と呼ばれる殿舎で、天皇はひとりの異性の神を迎える。両方の殿舎には寝具が敷かれており、それは「（性）行為の模範的な表象」（『共同幻想論』）となつている。その模範的な性行为で、天皇は迎えた異性神と一体化し、それによつて自らが神となる。あるいは自らの神と交わる祭司となる。このとき、天皇は農民に対して宗教的な権威を帯びた存在に転じる。

天皇は迎えた異性の神と共食もする。共食はそれ自体が性行为の代替であり、稲に豊かに実る神的な力を与える象徴的な行為となる。性行为の結果による子の生誕に穀物の実りが象徴されるのは古い社会に共通している。その穀物は生命の維持という現実的な利害を担つており、それを実らせる力はしたがって現実的な権力に転化する。

30代 その儀式の扱われ方がどう変わったんだ。

年金 大嘗祭をめぐる現在の学説は、

戦時下では、この「交換」のバランスが崩れた。政府によつて現人神としての天皇が強調されたため、天皇は国民から拝まれる「テイク」のほうが増大し、国民（の神）を拝む「ギブ」が減少した。「交換」は「テイクアンドテイク」へ傾斜し、本来の天皇制から逸脱し始めた。先代天皇の慰霊の旅にはそのアンバランスを修復しようとする無意識の動機が働いていたと推察される。戦地や被爆地を訪れ、その犠牲者を慰霊することは、農民の神を拝むことに相当する。

30代 アンバランスは明治維新のときすでに始まつていたのではないか。

年金 その通りだ。明治維新では天皇制の西洋化がもくろまれた。日本を欧米列強に対抗し得る中央集権国家にするため、それには、天皇を宗教的な権威を備えただけの存在から、政治的な権力を持つ西洋並みの君主にする必要があつた。

明治維新で成立した中央集権的な体制は、分散していた権力をひとつにまとめたシステムだから、宗教的な権威

この儀式から性の要素を消し、食の要素を主としたものが主流となつていく。ウィキペディアには、「大嘗祭の本義は、稲や粟など農耕の収穫を感謝し、国土に起こる災害現象に対する予防のため、山や川の自然が鎮まるよう

としての天皇の権力もその中に組み込まれる。おのずと天皇の政治性が強まる。明治憲法が「大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」と、天皇に強大な政治権力を与える一方で、「皇位ハ皇室典範ノ定ムル所ニ依リ皇男子孫之ヲ繼承ス」として、皇室の伝統に一定の政治的な縛りをかけているところにそれがあらわれている。

30代 新憲法はそうした天皇像を百八十度に近いほど大幅に書き換えた。

年金 だが、その地位と役割を憲法で定めたこと自体が、天皇の政治性を残すことになった。憲法は政治的国家的骨組みをなすものであり、その中に組み込まれた以上、政治的であることを免れない。その影響は、ふだん考えられているより大きいと思う。

それは皇位継承儀式の大嘗祭の扱われ方にもおよんでいる。この儀式は食と性というふたつの要素が分かちがたく結びついている。性の要素は新しい天皇に宗教的な権威を、食の要素は世俗的な権力を与える源泉をなす。

に祈念するもの」という岡田莊司の説によつて、「真床覆衾」論（折口信夫）も聖婚儀礼説（岡田精司）もほぼ完全に否定されている、とある。これは研究上の変化だけによるものではなく、大嘗祭に対する天皇自身、そしてそれにかかわる周辺の見方、扱い方が変化した結果と考えられる。

皇位の継承は性を媒介に行われているのに、それを否定するのは、天皇の宗教的な権威の源泉を否定するに等しい。そしてこの儀式の要素を食に限定するのは、天皇の力を政治的な権力に限定することを意味する。それは大嘗祭の「近代化」であり、明治政府による天皇制の「近代化」＝「政治化」の延長線上にある。

このことは天皇の宗教的な権威の衰退を意味し、したがつて天皇制そのものの衰退の兆候に見える。その兆候は前に触れたように自民党の弱体化にもあらわれており、今後さまざまなところで目にするだろう。

ニュース日記 984
中村 礼治

天皇制民主主義のゆくえ (中)